

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	學徒出陣：短歌
Author(s)	石丸，公
Citation	龍南， 2 5 4： 5 0 - 5 2
Issue date	1944-06-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8568
Right	

久しくは許してくれまい

山あひのゆふぐれ

あをく烟つた屋根々々を

やがて

幾つめかのちまへの旅立ちのため

しろがねの轍わだちが走りつゞけてゐる

短歌

學徒出陣

文二ノ二

石

丸

公

事しあらば捧げむ命時もよし徴集猶豫いま廢止せらる

天地のたゞならぬ中に學徒われら祝いわがむかなや徴集猶豫廢止令

數たのむ敵には數もて應ふべし青年學徒の起つときはいま

今をちきてまた來む時はなかるべしこぞりて起たな日本の學徒

大御代に新榮あらさかちこそ幸ぞ振ひ立ち征けますらをの伴

來るべき遂に來りぬ學徒われひとつ御聲にためらひあらず

わが胸にとゞこほるもの今はなし起ちて撃つべき時は來向ふ

感激にたかぶりし心をさまりていくさのはたて強く凝視す

聊かもわれためらは學をおきて戦ひ死なむと心きめたり

山征かば草むす屍とかへりみず學問の道をこゝにきはめむ

山 峽

峽のうへに月さだまりて水流れぬる如き道杉林に入る

山脈に傾き初めし月光は冴え冴え庭のゆづり葉照らす

曇り日の暮れゆかむとして峽のうへ白き光りの久しくたもつ

西空よりひるすぎて湧きそめしきり雲はたちまち峽にとゞろきわたる

山峽は黄なる光りのみなぎらひ雑木木の葉は落ち初めむ

しげりつつ展くる谷は朝光にはるかに低く水が光りぬ

水音のひびく峽は草あれて光り照りかへす笹のひとむら

近 詠 抄

むぎむぎと吾はるがたしつはものつひの命は燃え立ちにけむか（マキン・タワラ島）

こゑのみてしばしはなげ敵撃たむ思ひは炎のごとく燃えたつ

さむらひは死ぬることゝ見つけたらしみじみとして今宵葉隠を読む
 絶對におし進みゆくみ戦に吾が命さへかりそめならず
 向き變りし電車の中に夕日さし眼鏡の微塵がいたく光りぬ
 心鈍れるごとくわが居る机の上青き蜜柑が三つおかれあり

新春有感

文一ノ四

玉

利

勳

生活の充實といふは生やさしおのれ焼き盡すまで生き抜かんと思ふ
 新しき力わくとき二十一年のわが苦しみはもののかずならず
 いらはやく中支戦線にありといふ學兵の記事を黙しつつ讀めり
 ひとり醒めしろき紙片に走らす新しきペンの翳りするどし
 赤インキ染みたる指の冷えゆきて悔深き日の日記をしるす
 十年戦役の彈痕あまた今にして縣立病院の壁にのこれり
 怯ぶおづと寄りくる牛の瞳には憧れに似しものあらざりき
 乳しぼる若き男は肩あげて牛舎の奥に光あかるし